様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８６２１８２

研究課題名（和文）女子大学生に対する子宮頸がん教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of an Educational Program on cervical cancer for Female University Students

研究代表者
長谷川　文子（HASEGAWA, Ayako）

岐阜大学・医学部・助教

研究者番号：９０６３２８４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の予備研究である「女子大学生の子宮頸がん検診に対する認識と行動の関連〈思春期学、33（1）、172-185、2015〉」で得られた結果を参考に、これまで子宮頸がん検診を受診したことのない女子大学生を対象とした子宮頸がん教育プログラムを開発した。本プログラムは、女子大学生の受診行動の規定要因として抽出された【障害】【利益】【リスク認知】【脆弱性】の4つの認識へ働きかける構成とした。
教育プログラムを受講した女子大学生のうち、適格条件を満たした31名が最終的な研究対象者となり、このうち14名は性交経験者であった。教育プログラム受講後6か月までのあいだに計3名が子宮頸がん検診の受診に至った。

研究成果の概要（英文）：Based on the results of a preliminary study “Relationship between awareness and behavior of female university students regarding cervical cancer screening” (Adolescentology: 33 (1): 172-185, 2015) conducted prior to the present study, we developed an educational program on cervical cancer for female university students who had not undergone cervical cancer screening. This program consisted of 4 parts that would influence their perceptions regarding cervical cancer screening, namely, “barriers,” “benefits,” “perceived risk,” and “perceived fear,” which were identified as the determinants of seeking cervical cancer screening.
From among the participants of the educational program, 31 female university students who met the eligibility criteria were selected as the final study subjects. Fourteen subjects had engaged in sexual intercourse. A total of 3 subjects underwent cervical cancer screening during the 6 months after participation in the educational program.

研究分野：看護

キーワード：子宮頸がん　子宮頸がん検診　がん検診　女子大学生　教育プログラム

１．研究開始当初の背景

子宮頸がんは女性特有のがんとしては乳がんに次いで 2 番目に高い発症率であり、20 代での罹患率が急増している。若い女性が死亡する、あるいは妊娠･分娩の機会を失う可能性のある社会的にも影響が大きいがんである。子宮頸がんの原因はほとんどがヒトパピローマウイルス：HPV であり、性交渉にともなう HPV 感染は非常にありふれている。子宮頸がん患者の 90%以上から HPV が検出されることは知られているが、多くの場合、自覚症状のないうちに身体の自然な免疫反応により HPV は体内から排除されると考えられている [1)]。子宮頸がんの早期発見には子宮頸部細胞診が有用であり、多くの参加観察研究により、その死亡率減少効果は科学的に証明されている [2,3)]。先進諸外国の子宮頸がん検診受診率はおおむね 70-80%前後である反面、日本人女性全体の受診率は 30%程度、とくに若年女性に限定した場合は数%と極めて低い [4-7)]。

若年女性の婦人科受診にはとくに不安と羞恥心を伴い、何らかの身体症状や不調がでるといった危機的状況になった時にはじめて受診行動がとれるとされている [5,8-9)]。子宮頸がん検診の必要性を感じていながらも、実際の受診行動にはつながっていないケースが多数存在することは先行研究においても報告されている [5)]。

そこで本研究では、女子大学生の子宮頸がんや子宮頸がん検診に対する認識について明らかにした予備研究を参考に、子宮頸がん検診の普及をめざした教育プログラムを開発し、実施･評価した。これまで、女子大学生を対象とした論理的･体系的な子宮頸がん教育プログラムの開発はみられておらず、より効果的なプログラムの開発が求められている。

２．研究の目的

本研究の目的は、女子大学生すなわち成熟期前期にある若年女性に対する子宮頸がん教育プログラムを開発･実施し、事例を通してプログラム開発過程を記述することで修正案への示唆を得ることである。

３．研究の方法

（1）女子大学生の子宮頸がん･子宮頸がん検診に対する認識

本研究の予備研究 [10)]において、女子大学生 184 名を対象に質問紙調査を実施したところ、子宮頸がんや子宮頸がん検診に対する認識は、【子宮頸がん検診に対する障害】、【子宮頸がん検診の利益】、【子宮頸がんのリスク認知】、【子宮頸がんへの脆弱性】の 4 因子より構成されることが明らかになった。女子大学生を対象とした教育プログラムを作成する際には、この 4 つの認識にアプローチすることが有効となることが示唆された。

（2）教育プログラムの枠組み

本プログラムは、予備研究で明らかとなった女子大学生が抱く子宮頸がん検診に対する 4 つの認識を基盤に作成した。ここで、Health Belief Model：HBM は、自分が病気なれば重大な結果を引き起こしかねないと考え（脆弱性と重大性）、自分で実行できる一連の行動をとれば病気によりもたらされる重大な結果も軽減できる利益があると信じ、その行動によってもたらされる利益が行動をとることで被ると想定される障害あるいは損失を上回ると信じるとき（認知された行動変容による利益と障害の差）、人々は健康を管理しようと行動をとるとされている [11-12)]。4 つの認識を基盤としながらも、HBM も参考に、本教育プログラムは、予備研究において抽出された 4 つの認識に働きかける展開とし、参加者が子宮頸がんへの【リスク】を認識し、子宮頸がん検診を受診することの【利益】がその【障害】を上回ると考えるとき、行動変更（受診行動）が起こることをめざした構成とした。

教育プログラムのタイトルは、「知ろう!守ろう!あなたの子宮!!～子宮頸がん検診の普及をめざして～」と題した。

（3）教育プログラム目的･目標の設定

ヘルスプロモーションの手法を参考に、教育プログラムの目的および目標を以下のように設定した。

①プログラム目的

女子大学生が自らの健康を守り、意思決定ができるよう、若年女性において罹患率が増加している子宮頸がんを予防･早期発見するための子宮頸がん検診について、情報提供を中心におこなう。

②プログラム目標

20 代の女子大学生が、子宮頸がんおよび子宮頸がん検診に関連する正しい情報提供を含んだ教育プログラムを通じて、子宮頸がん検診の受診にむけた知識と認識を身につける。

（4）プログラム教材の開発

表に示した教授学習計画書を作成し、教育プログラム内で使用するパワーポイントや配布資料などは看護学分野の研究者および産婦人科医のスーパーバイズを受けて作成した。参加者へ配布するパンフレットは A4 サイズで全 38 ページから構成され、中はすべてカラー印刷とした。一般女性でも分かりやすいように平易な言葉を用い、専門知識に関する解説のほか、子宮頸がん検診や子宮頸がん予防ワクチンを接種できる医療機関に関する情報などを掲載することで、プログラム参加後にも参加者が自主的に復習できるようにした。そのほか、プログラム内で使用するワークシートなどを作成した。

教育プログラムは､所要 2 時間ほどであり、研究者と研究協力者である産婦人科医が分

担して講師を担当した。研究者はファシリテーターを務めるほか、補佐を務める研究協力者として看護学研究者 2 名を確保し、プログラム当日の運営の補佐を依頼した。

展開 （時間）	参加者目標 内容	担当
導入 （15分）	あいさつ、研究者および協力者の紹介、研究趣旨の説明 研究同意書の説明・回収 〔プログラム直前の質問紙〕実施	研究者
展開1 （20分）	参加者目標1. “子宮”と“がん”へ関心を向けられる ・子宮とがんに関するワーク	研究者
展開2 （10分）	参加者目標2. 子宮頸がんについて正しい情報を得る ・子宮頸がんに関する基本的な特徴を知る	産婦人科医
展開3 （10分）	参加者目標2. 子宮頸がんについて正しい情報を得る ・子宮頸がんの近年の動向を知る	産婦人科医
展開4 （10分）	参加者目標3. 子宮頸がん予防ワクチンについて正しい情報を得る ・子宮頸がん予防ワクチンの基本的な特徴を知る ・子宮頸がん予防ワクチン接種の実際 ・副作用に関する報道を含む近年の動向	産婦人科医
展開5 （40分）	参加者目標4. 子宮頸がん検診について正しい情報を得る ・子宮頸がんの概要の復習 ・がん検診の意義 ・若い女性にとっての子宮頸がん検診の重要性 ・日本人女性の子宮頸がん検診受診率－海外との比較 ・子宮頸がん検診の実際　　ほか	研究者
帰結 （15分）	プログラムのまとめ、質疑応答 〔プログラム直後の質問紙〕実施	研究者

表 教育プログラムの教授学習計画概要

（5）プログラム前後の質問紙調査

プログラム前後の 4 時点において質問紙調査をおこなった（下図）。質問紙において、参加者の属性のほか、プログラム内容・方法や子宮頸がんに関する基本的な知識を問う知識問題、予備研究で開発した子宮頸がん・子宮頸がん検診に対する認識などを尋ねた。

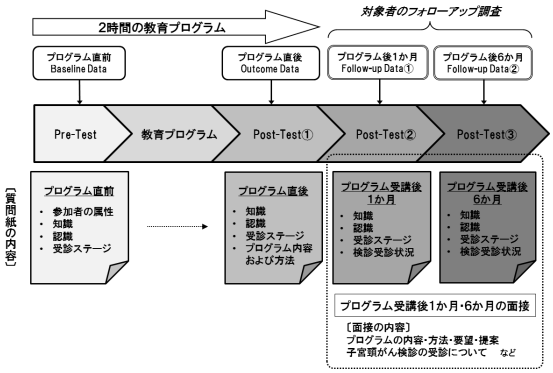

図 教育プログラム前後のデータ収集過程

（6）プログラム後 1 か月および 6 か月の時点における面接調査

プログラム後 1 か月および 6 か月の時点において、参加者に対して半構成的面接を実施した。面接では、子宮頸がん教育プログラムの感想や内容や方法に関する提案・要望、プログラム受講後の子宮頸がん検診の受診状況についてなどを尋ねた。

（7）データ収集期間

プログラム受講後 6 か月の面接までを含め、データ収集期間は 2013 年 4 月～2015 年 3 月であった。

（8）研究協力者への倫理的配慮

研究協力の依頼にあたり、プログラム参加者に対して下記の内容を文章にて説明し、教育プログラム当日も口頭にて再度説明したうえで同意を得た。

①本研究への参加は、プログラム参加者の自由意思によるものであること。

②質問紙調査は無記名とし、プログラム参加者の匿名性はいかなる場合にも守られること。

③プログラム参加者の意思により、研究のいかなる時点においても、協力を辞退できること。その場合には、プログラム参加者はいかなる不利益も被ることがないこと。

④得られた情報（質問紙、IC レコーダー、グループワークの資料など）や個人情報を匿名化したものに関しては、学会等に発表されたのち 3 年間は保存するが、そのほかの情報は、本研究終了後に破棄されること。

なお、本研究は、研究計画書の段階で名古屋市立大学大学院倫理審査委員会（承認番号 12036）、および、岐阜大学大学院医学系研究科医学研究等倫理審査委員会（承認番号 24-261）において承認を受けたのちに実施した。

４．研究成果

（1）対象者の推移

プログラムの実施からフォローアップ期間の完了するプログラム後 6 か月までのあいだ、以下のように研究対象者数は推移した。

①プログラム応募から実施まで

本研究のプログラムへの応募総数は 34 名であった。プログラムを受講したことによる子宮頸がん検診の受診への行動変容を測定するため、本プログラムの対象者の適格条件として、子宮頸がん検診未受診者であることを設定した。ここで、応募者 34 名うち 2 名は、応募の時点で子宮頸がん検診受診者であるが自己学習のために参加したい旨の申告があったため、適格条件にはあてはまらないが、プログラムへの参加を認めた。プログラム中はほかの参加者と同様に、直前質問紙と直後質問紙への回答をおこなったが、当初より研究対象からは除外した。プログラム中に退席する者はおらず、脱落者はみられなかった。

ここで、プログラムは計 3 回実施しており、各回の参加者数は、第 1 回目が 8 名、第 2 回目が 9 名、第 3 回目が 14 名であった（不適格者を除外した最終的な対象者数）。参加者は、所要 2 時間のプログラムへ 1 回のみ参加した。

②プログラム受講直後から 1 か月まで

1 か月質問紙にて、1 名について子宮頸がん検診受診者であったことが判明し、本人へ説明したうえで研究対象より除外した。1 か月質問紙への回答および回収は、対象者 31 名から得られたが、面接への同意を得られたのは 13 名であった。面接への同意を得られなかった対象者のデータはすべて収集できているため、そのまま研究対象として採用した。

プログラム受講直後から 1 か月までの期間に、1 名が子宮頸がん検診を受診した。

③プログラム受講後 1 か月から 6 か月まで

不適格者はみられなかった。6 か月質問紙への回答は 30 名より得られ、面接への協力は 13 名より得られた。

プログラム受講後 1 か月から 6 か月までの期間に、1 名が子宮頸がん検診を受診した。

④プログラム受講から 6 か月以降

プログラム受講後 6 か月以上経過した時点で、1 名が子宮頸がん検診を受診した。

プログラム受講後 6 か月の質問紙の回収および面接が終了した時点での最終的な対象者数は 31 名であった。継時的に回収した質問紙にデータの欠損はなく、すべてを分析対象とした。

（2）対象者の属性

対象者の属性について、プログラム直前の質問紙において尋ねた。

対象者 31 名の平均年齢は 21.66±1.85 歳であった。学年平均は 3.26±1.85 であり、3 年生の参加が最多であった。半数以上が医療福祉系以外の学部に在籍しており、看護系も 10 名含まれていた。また、性交経験のある者は 14 名（45.2%）であり、平均初交年齢は 18.86±1.25 歳であった。最頻値は 19 歳であり、大学進学後にセクシャルデビューしたと思われる割合が高いという結果は、本研究の予備調査と同様であった。これまで「月経痛」や「月経不順」、「体重減少による月経停止」など月経に関連した自覚症状を主訴に婦人科を受診した経験のある者は 12 名（38.7%）であった。本プログラムに参加する以前より子宮頸がん検診を知っていたとする者は 27 名（87.1%）と高率であった反面、子宮頸がん無料クーポンを知っていた者は半数であった。子宮頸がん予防ワクチンについては、「接種希望なし」「接種希望あり」「接種済み/接種途中」と回答した者は同程度であった。

（3）教育プログラムの評価

ヘルスプロモーションのプロセス評価の手法を参考に、4 項目（対象集団の理解、満足度、活動の実施、教材と構成要素の質）について評価した。

①参加者の理解

主な評価指標は、プログラム受講直後に実施した直後質問紙の結果であり、プログラムにおける各展開の難易度について尋ねた。〔展開 1〕『“子宮”と“がん”に関するオープニングワーク』ついては 27 名（87.1%）が「ちょうどよい」と回答し、3 名（9.7%）が「簡単だった」、1 名（3.2%）が「難しかった」と回答した。〔展開 2〕『子宮頸がんの基本的知識』については 27 名（87.1%）が「ちょうどよい」と回答し、3 名（9.7%）が「簡単だった」、1 名（3.2%）が「難しかった」と回答した。〔展開 3〕『子宮頸がんの近年の動向』については 25 名（80.6%）が「ちょうどよい」と回答し、4 名（12.9%）が「簡単だった」、2 名（6.5%）が「難しかった」と回答した。〔展開 4〕『子宮頸がん予防ワクチン』については 28 名（90.3%）が「ちょうどよい」と回答し、3 名（9.7%）が「簡単だった」と回答した。〔展開 5〕『子宮頸がん検診』については 28 名（90.3%）が「ちょうどよい」と回答し、3 名（9.7%）が「簡単だった」と回答した。『子宮頸がん予防ワクチン』と『子宮頸がん検診』について、「難しかった」と回答した参加者はみられなかった。以上より、プログラム全般にわたり参加者の理解度は高く、作成したプログラムの内容は女子大学生にとって理解しやすいものであることが示された。

直後質問紙の自由記載からは「子宮の構造から説明してもらえたことで、子宮頸がんがどういうものであるのか分かった」、「実際に子宮頸がん検診で使用される医療器具や内診台の写真やイラストがあり、検診の内容がよく分かった」、「検診の結果、精密検査が必要となる割合の高い年代が、検診受診率の低い年代と重なっていることを初めて知った」、「日本人、とくに女子大学生の受診率の低さに驚いた」、「早期発見の大切さ、検診の大切さが分かった」など今回のプログラムのメインテーマである子宮頸がん・子宮頸がん検診に関して、新しい知識の獲得や認識の変容につながったという声が多く寄せられた。また、「プログラム前から知りたいと思っていた」、「ワクチンの効果や副作用について聞けて良かった」、「実際の副作用や死亡例があるのかもっと聞きたかった」など、子宮頸がん予防ワクチンに関する記載も複数あった。プログラム全体として、提供した情報について参加者の理解を得ることができ、また、参加者の関心に見合った内容のプログラム展開であったことを確認した。

②参加者の満足度

主な評価指標は、参加者のプログラム受講直後の質問紙の結果および面接において聴取した参加者からの意見である。〔展開 1〕『ワーク』に関して、15 名（48.4%）が「とても満足」、16 名（51.6%）が「やや満足」と回答した。〔展開 2〕『基礎知識』に関して、17 名（54.8%）が「とても満足」、14 名（45.2%）が「やや満足」と回答した。〔展開 3〕『近年の動向』に関して、21 名（67.7%）が「とても満足」、9 名（29.0%）が「やや満足」、1 名（3.2%）が「やや不満」と回答した。〔展開 4〕『予防ワクチン』に関して、20 名（64.5%）が「とても満足」、9 名（29.0%）が「やや満足」、2 名（6.5%）が「やや不満」と回答した。〔展開 5〕『子宮頸がん検診』に関して、27 名（87.1%）が「とても満足」、4 名（12.9%）が「やや満足」と回答した。以上より、概ねプログラム全体として、参加者の満足度は高

く、高い評価を得た。ここで、〔展開 3〕『近年の動向』および〔展開 4〕『予防ワクチン』については、「やや不満」と回答した参加者が少数ながらみられた。〔展開 3〕『近年の動向』の難易度について、2 名が「難しかった」と回答したことが関係しているかもしれない。『近年の動向』は、「部位別・年齢別にみた子宮がん発生率」「子宮頸がんの年齢調整発生率の年次推移」、「子宮頸がん発生率の年齢別年次推移」といった内容を中心とした講義であり、医療福祉系以外の学部に所属する参加者にとっては聞き慣れない言葉が多く、このことが理解や満足度をえられなかった一要因であった可能性がある。また、『予防ワクチン』の難易度について「難しかった」と回答した参加者はみられず、全体の理解は得られたものの、参加者の予防ワクチンに関する関心の高さが自由記載より伺えることから、報告されている副作用に関する症例や症例数、対応策、今後の動向など、参加者は予防ワクチンに関するより具体的で発展的な内容を求めていた可能性も考えられる。

プログラム全体の評価として、開催場所や日時、会場、プログラムの長さ、参加人数に関して尋ねた。概ね「適切」と回答した参加者が多かったが、プログラムの長さや参加人数については、「長い」「少ない」という意見もあり、今後の検討課題となった。

質問紙の自由記載と面接での参加者の意見より、プロセス評価において評価されるべき点とされている[13]「内容」「ファシリテーター」「教材とリーフレット」「場所―施設・設備」「そのほか」の 5 項目についてまとめた。さらに、研究目的に沿って「プログラム実施に適した時期」を独自に追加し、検討した。ここでは、『性交開始前の中高生の時期』が適切と考える意見や、反対に、『中高生では心の準備ができておらず自分のこととして聞くことができない』という意見、『時間に余裕のある大学 1 年生』、『大学にも慣れ交友関係が広がる大学 2～3 年生』、『大学 3 年生は無料クーポンを受け取る時期とも重なり適切である』、『大学 4 年生は就職や卒論があり時間をつくることが難しい』、『就職すると学生の頃より多忙になるため、卒業前に聞いておきたい』という意見などさまざまな提案があり、プログラムの修正案で提示する検討課題となった。

③活動は実施されているか

プログラム実施中、サポート約である研究協力者からの指摘はなく、プログラムはほぼ計画に基づいて実行された。第 1 回目に関しては、急遽、厚生労働省の『一時的に積極的なワクチン接種の推奨を控える』方針に関する解説を追加したため 15 分ほど延長したが、プログラム参加者の途中退席はなく、最後まで実施できた。第 2 回目以降は、延長はなく時間内にすべてを終了した。

④教材と構成要素の質

今回のプログラムの主な教材は、子宮頸がん・子宮頸がん検診の正しい情報提供のために作成したパンレット 1 冊、パンフレットの内容と連動したパワーポイント、妊娠子宮模型である。直後質問紙において、教材の適切性について尋ねた結果、すべてのプログラム展開において全員が「適切」と回答した。とくに〔展開 5〕『子宮頸がん検診』に関しては、80.6%の参加者が「とても適切」と回答し、本研究の根幹であり、かつ、プログラムの中心でもある子宮頸がん検診について、参加者にとって分かりすく、受け入れられやすい内容の教材となっていることが示された。

研究協力者である産婦人科医や看護学研究者からは、総合的には伝えたい目的に合ったインパクトがあり、必要な内容を網羅した教材であるという評価を得た。パンフレットは「適度なボリュームであり、文字よりもイラストや写真が多く、若い世代でも抵抗なく読み進められる」ものであり、「専門用語ではなく平易な言葉で表現されており分かりやすく」、「プログラム終了後も成果物として何度も手に取り読み返す機会があるだろう」、「研究者の“若い世代へ伝えたい”というメッセージが伝わる仕上がりである」といった意見が寄せられた。一方で、今回のプログラムの中心はあくまで子宮頸がん検診であるため、子宮頸がん予防ワクチンに関しては概要の記載しかパンフレットにはないが、昨今の子宮頸がん予防ワクチンをめぐる動向を受けて、自由記載からもワクチンの効果やリスクには彼女たちも敏感になっていることは明らかであった。そのため、「ワクチンに関する詳細を追加」し、「自分自身で、効果とリスクについて考えられる内容」としながらも「現時点ではワクチンを積極的に勧める内容は不適切であるが、副作用を強調していたずらに不安にさせるのではなく」、「ワクチンのみの予防では不十分であり、成人女性では子宮頸がん検診が大前提となることを改めて伝える」必要があるのではないか、とコメントがあり検討課題となった。

パンフレットに記載した近郊の子宮頸がん検診委託医療機関一覧や問い合わせ先一覧は、「若い女性が、自分の健康に関心をもち行動を起こそうとするとき、こういったリストはありがたい」という評釈があり、また、個別に手配していた遠方の医療機関に関する資料に関しても、「自分のために別資料を用意してもらえたという思いは、参加者自身からみると、主催者から大切に思ってもらえたという安心感や信頼感につながる」という評価を得た。パンフレットに記載しきれなかった内容をパワーポイントや配布資料で補足したことで、「参加者は正確でアップデートな情報を入手できた」という評価を得た。そして、〔展開 1〕ワークの終盤で使用した初期～10 か月の妊娠子宮模型について、研究協力者からは「このような模型を初めて見る参

加者も少なくない。参加者が身を乗り出して覗き込んでいた姿や反応から、模型はプログラムに重要な役割を果たしていた」という意見があった。

構成要素の質について、研究協力者より主に以下のように講評を得た。

プログラムの内容は、「研究協力者である自分も、関心をもちながら正確な情報を得られずにいた」、「興味深く、意味のある」内容であり、「日頃接する機会の多い若い女性たちが実際に心配している話題」でもあったという評価を得た。〔展開 1〕『“子宮”と“がん”に関するワーク』では、「思っていた以上にさまざまな意見が出されて、医師である自分も、大学生がどのような考えをもっているのかとても興味深かったうえに、プログラム前半で参加者の特徴を把握することができた」が、「もっと参加者に考えさせる時間を与えてはどうか」といった意見や、「参加者は自分が書いた言葉を一気に読み上げるため、カードに書き出す作業が追い付かなかった。ひとつひとつの言葉を大切にするようにフィードバックしながら時間をかけて進めてはどうか」といった意見があった。

以上より、4 つの視点について子宮頸がん教育プログラムのプロセス評価をおこなったところ、参加者および研究協力者より多数の肯定的な意見とともに改良点についても提案を得ることができ、教育プログラム修正案への示唆がみえてきた。

本研究では、予備研究で明らかとなった女子大学生が抱く子宮頸がん検診に対する 4 つの認識【子宮頸がん検診への障害】【子宮頸がん検診の利益】【子宮頸がんのリスク認知】【子宮頸がんへの脆弱性】を基盤に、これらの認識に働きかけるよう構成した子宮頸がん教育プログラムを作成した。とくに、プログラム立案と実行からプロセス評価を試み記述した。プログラム立案では、目的および目標を示し、目標達成のための具体策を作成した。プロセス評価として、概ね参加者の理解度や満足度の高いプログラムであることが示唆された。一方、参加者からの意見も参考に、プログラムの実施時期や実施対象などについて修正課題があがった。研究対象者 31 名のうち 14 名は性交経験者であり、このうち 3 名がプログラム受講後に子宮頸がん検診を受診した。4 つの認識を基盤にした女子大学生に対する子宮頸がん教育プログラムの戦略的意義、助産師による子宮頸がん支援の重要性が確認された。

＜引用文献＞

① がん対策情報センター：国民生活基礎調査による都道府県別がん検診受診率データ、2013.
② 国立がん研究センター がん予防・検診研究センター：有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン、2013.
③ UpToDate：Cervical cancer screening tests：Evidence of effectiveness、2013.
④ 今野良：HPV ワクチン（子宮頸癌予防ワクチン）、知っておきたい子宮頸がん診療ハンドブック、112-125、中外医学社、2012.
⑤ 千葉直美：女子大生の性行動と健康行動の関係についての検討、熊本県母性衛生学会雑誌、10（35）、35-43、2007.
⑥ 関屋伸子、原由希子、谷口一郎、肥田木孜：若年男女における子宮頸がん検診に対する意識の比較、母性看護、（41）、33-35、2010.
⑦ 梅澤敬、星山佳治、落合和徳、池上雅博：30 歳未満女性の子宮頸がんに対する意識とがん検診受診要因に関する研究、厚生の指標、59（2）、 17-22、2012.
⑧ 宮崎文子、中山晃志：女子高校生の性に関する不安と受診行動、思春期学、24（2）、352-358、2006.
⑨ 笹原理会、岩本玲奈、徳永明子、久安利枝、山下佳子、木藤雅子：大学生の性感染症に関する意識と知識の現状 性教育改革の必要性、ペリネイタルケア、20（8）、730-735、2001.
⑩ 長谷川文子、北川眞理子：女子大学生の子宮頸がん検診に対する認識と行動の関連、思春期学、査読有、33 巻 1 号、172-185、2015.
⑪ Marshall H.Becker et al. Selected Psychosocial Models and Correlates of Individual Health-Related Behavior. MEDICAL CARE,15（5）,27-46.1977.
⑫ Glanz.K.,Rimer,B.K,Lewis,F.M.（2002）／曽根智史、湯浅資之、渡辺基、鳩野洋子監訳（2006）、健康行動と健康教育‐理論,研究,実践、第 1 版、医学書院.
⑬ Hawe,P.,Degeling,D.,&Hall,J.（1990）／鳩野洋子、曽根智史訳（2003）、ヘルスプロモーションの評価－成果につながる 5 つのステップ、医学書院.

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 長谷川文子、北川眞理子、女子大学生の子宮頸がん検診に対する認識と行動の関連、思春期学、査読有、33 巻 1 号、2015、172-185
https://reg.ibmd.jp/adolescence/member/downdir/vol33_no1/Vol.33_No.1_172.pdf

6．研究組織

(1)研究代表者

長谷川 文子（HASEGAWA,Ayako）
岐阜大学・医学部・助教
研究者番号：90632844

(2)研究協力者

長谷川 幸生（HASEGAWA,Yukio）